



悦
詠七
部集

後
み
の

三

晋其角序



那潜乃集つる事古今に
わたりて道にあらざる起る
き時たれや幻術の事一や
しるるれり魂を入る事
とゆえに秘ありて似る
西久く世よりあり
とく人よりありて不変なり



をち〜じ五徳いっふよ及こ
ほんをこ〜ほ通さるゝを
こなり彼ぬり上人代骨り
て人を作る〜〜詳へれ
多る笛を吹やうになん結る
とろされを人よ成て結連
やも五の詳の〜結る家は
及魂乃法れをちう〜は結ふ

屋成さしたち〜为れ入る
〜アイウエフ〜ひささ
い〜〜吟詳〜おめ通
〜只能階の魂れ入〜結
〜ころ〜我翁行脚乃〜
休智越〜ちう山中〜
横〜小義を看ぞ〜能階
乃神を〜ぬすい〜結した

ちまたに新腸代はるをい
 しをゆあに懼る人す勿
 術なりこれえうて此
 集をつくもこれ様との
 付しはまきある是く
 けんりり魂を合せし
 凡兆乃ほ一なりなる
 事

猿蓑集卷之一

冬

初に我猿を小蓑をほけ也
 あまのけをほるも夜は
 時をさや並ひよる朝
 幾人し我のぬき
 幾人のね振るし
 廣原やしち時を
 史邦

僧
 丈艸
 膳所
 正泰

舟人よめつとてふし可なり 尚白

伊賀の境より

やうや奈良の隣乃一時而 曾良

時をもちや畢まつし屋窓あり 凡兆

るるそ竹田の里やち―とれ 乙羽

多きされ一里の光や小夜時毎 羽紅

新田は稗穀屋―とて 昌房

い―とや沖の河ぬれま帆片帆 去来

しつたよちや北斗れ星のあ 百歳

いゝも動く地をを動かぬれ 野水

流る

し―とに何とわ―と船の中 其角

歸るれうなるちん迄切し 同

禪もれまのるるや神す月 凡兆

百舌をわゝるやち松よ十日 嵐蘭

か―と頬腫痛む人の影 芭蕉

あふけを響かすの冬をえ
凡兆

なつて

掉座のこもりぬる枯ゆれ
土芳

流杯をたうて通す十夜外
膳所 裾道

ちやのふゆやいづ人あさる女
伊賀 越人

ふりしは茶ふゆふゆき
伊賀 猿雛

ちちれ貴子もきりきり
凡兆

公羽の堅田ふゆをいづ

雑炊のかきりきり
其角

こふきと牡丹のふゆふゆ裸
伊賀 東来

草津

あふきりきりふゆのこりれ
尚白

非逆水にきりきり
珍碩

霜月朝旦

揺るりふゆ物あふ赤柏
伊賀 良品

水き月れあふゆき水仙ふ
羽後田 不玉

脊門に乃入るよのほるふるれ 丈艸

いにしへ雪よまふきて鳴千鳥 千那

矢田のゆきや浦のあふれは鳴千鳥 凡兆

筏とけふんる跡や鴛鴦のす 本節

水底をうんで見ゆ魚の小鴨を 丈艸

ふらんも寝入るわらふ余吾の湖 路通

死まへて揉成らん鷹はんか 景蒙

襟をより首引入る冬月 杉風

天本戸や鰻のきれて冬月 其角

かゝるれ蒲団をうらやみの旅 長崎 暮年

見やうとせん旅人ふり 石部山 智月 大津尼

翁の御れふも食をあらへ
つる記あり略く

首をうけてうらふらんやけ食 義濃 竹戸

題竹戸之食

玉をわ我をけあふ紙食 曾良

魚のけ糖乃やうてやうと秋や 探丸

志のこゝに教珠もはるす網代也 史邦

白砂は候す

膝つゝまゝに居る霞れ 史邦

桜樹の葉は霞に狂ふあり 野童

鶺鴒乃鶺鴒よりす霞教ふれ 伊賀 不蜂

呼ふと射賣ふとぬあられ 凡兆

さういふ海よりや朝飯の世も 曠所 盡好

さうさや内より居られ人へ 其角

おきよ響部盛のうゝ朝顔 史邦

おきよのうゝ風吹くやも 羽紅

わさもろゝ凡れ松のうゝ 探丸

下京やさうじとほに夜れ面 凡兆

なまゝと川一筋やさうの原 同

信濃路をさう

さうらゝや植ふれ花のうゝ 芭蕉

草庵の留はさう

妻老の爲屋もあつて菴れを

其角

方代目八竹の子孫うはさうなる

尾張 羽立

許よる健あつてさうなうし

長崎 卯七

いりらてちやさうのうさ

去来

青亜追悼

乳のこもに世を解くも歸去

尚白

うゑも元也の慶をされ内

芭蕉

餅に懐かぬは似ぬをみ

乙卯

一月にあはれをさうらう

文州

住吉奉納

夜神系や鼻息白一面の内

其角

節季候よつうじき事しれ

伊賀 須琢

あやうらやまうし

同 祐甫

乙卯 新宅

くゝ家とてさうあふ年忘

芭蕉

弱法師家門ゆるせ餅のれ

其角

歳之夜や曾祖を告げふ木枕 長和
 ぐす望れしと云ふやうの音 去来
 らきてけふ事始まらば伊勢の 同
 大とやもたふはくくくく 羽紅
 やらふやふやふやふやふや 其角
 い孫のくふふふふふふふ 路通
 年のかた破道禱此歳とふふ 杉風

猿蓑集卷之三

夏

有月の面をすやけく 其角
 夏ふすく夏ふすく夏ふすく 木席
 ねを寝ふすく夏ふすく 芭蕉
 時ふすく夏ふすく 尚白
 けふふふふふふふふ 凡兆
 けふふふふふふふふ 智月

蜀魂なくやあつた角櫓 史邦

入おれしきつ中たにほろ 羽紅

ほろよほろあつたあつた 丈艸

ふたつ代官あつたあつた 去来

こいねを我唄てあつたあつた 遊女 奥羽

ねね一見のあつたあつたや
あつたあつたあつたあつた

去来やあつたあつたあつた 留良

あつたあつたあつたあつた 芭蕉

旅館庭でさうく
あつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あつたあつたあつたあつた 其角

あつたあつたあつたあつた 江戸 全峯

別僧

あつたあつたあつたあつた 越人

あつたあつたあつたあつた 琢碩

霜は伝はれてすまふ

似合しはげのこまはるる

亡人 杜國

春とさきふけりけのま

嵐蘭

井はすゑはくしり杜

出残

起きくゆはまきふね

船の回乃

起くのふくはなつ

仙化

題去来之岷峨洛柿舎

五極の如く木金屋を名起す 凡牝

破垣やうゝ麻子れがみ道

曾受

南都旅店

誰のこゝれれ乃園れ相

千那

洗濯やもあふとて凶怖のふ

尾張 薄笑

豊國より

竹の子れ力を得るふくへさ

凡牝

ふけれ子や富強く無き

去来

たけのこや稚き時の猪はふ

芭蕉

猪ノ吹入さうさうしれ 正秀

明石夜泊

時をやりしれよ夢の交月 芭蕉

君の代に筑屋桑を鋤一ツ 越人

五月三日

しるしをさす

包の音と並くしける高浦や 其角

粽はふかきふかきし額髪 芭蕉

隈の廣きふかきし餅粽 岩谷

さしきた客人やうしりや 尚白

五月六日大坂より死の
遠忌を吊しりて

大坂やうぬふれ夏乃ふ十夜 蝉吟

奥の宮に館より

箕草や兵九うけ先乃跡 芭蕉

遠出よわい屋下代蟻の新 同

い境にいりたるうしりて

かうつり角よりしける次々石 同

五月あゝ家より控てあらう
元兆

しねまは味なまきやありぬ
又節

ふとの謂はきありとつと雨
史邦

奥羽を越えぬの郡よりくはるる
の塚はくくくやとるはくくく

道より一里すくくたり乃方
笠はくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

笠はくくくくくくくくく
芭蕉

大和紀傳のさくくくくく
てはるの紙をくくくくく

紙のくくくくくくくくく
くくくくくくくくく

つくりもくくくくくく
去来

整利や一夜今情くありぬ
元兆

月の道や美くくく月ありぬ
芭蕉

経地や若くくくくありぬ
羽紅

七十余の老醫者よりくくく
くくくくくくくくくく
にくくくくくくくくくく
いふくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

けふ年よりとてとて
ゆゑさうりくも

六尺の力やうや五月あえ
其角

而れも妻より取つて茶摘す
去来

さうそや茶うよはまぬれ
正秀

つゝ食ふれりや妻島
照所 游力

孫と愛し
山

妻家れ家しやらん雨蛙
智月

妻家れ家しやらん雨蛙
花紅

あし川の園とて
山

月流のうや奥に田植
芭蕉

出羽のうととて
山

眉掃を面影しとね粉のふ
同

法隆寺南帳
南無佛のををを

法袴れうとてう
千那

田の畝れとてう
伊賀 万手

膳所曲水之樓とて
山

螢火や吹くはまのしづめのや

去来

夢田乃夢見二句

闇の夜や子を泣かすを夢みる

凡兆

いもつた船歌酔へたつた

芭蕉

こゝ然野へ泣くも時

長崎

螢火やうらうらうは思尾谷

田上尼

あけらしは霧と下りあふぬも

尚白

草むしや百合中こゝろの魚

半残

病後

うつらやめらうつら百合のふ

大板

何処

すけや家よりけし百合のふ

乙羽

蟻蚊辞を作

子やなん其子の母を蚊の喰ふ

嵐園

餞別

ちとすや蚊屋よりふぬ旅の宿

膳所

里東

うゝ人よつね々
系害するは者よれむけ

予、一、夜と昔、冠者、名、其、

時、或、や、蚕、の、生、く、以、耳、乃、官、
文、州

下、等、也、比、其、た、く、れ、蟬、の、を、
嵐、雪

客、や、り、や、指、を、か、け、る、野、の、新、
膳、所、探、志

形、く、記、ぬ、き、り、ま、つ、ん、き、す、野、の、を、
芭、蕉

表、さ、や、百、麻、刈、と、あ、の、の、は、
俣、賀、槐、市

流、り、多、く、深、の、花、の、う、流、哉、
九、北

舟、引、の、表、に、唱、奇、の、合、歡、の、花、
千、那

白、雲、也、鐘、の、う、も、日、れ、夕、
史、邦

素、堂、之、蓮、池、邊、

白、も、や、蓮、一、枝、の、花、ら、う、も、
嵐、蘭

月、焼、田、や、ほ、く、つ、く、鳴、く、蛙、
乙、羽

日、乃、田、者、と、鹽、の、池、に、蟻、
九、北

水、を、り、も、鼻、つ、も、あ、り、に、殺、す、を、
同

日、の、曇、や、こ、う、れ、く、暑、と、牛、け、合、
正、秀

予、一、夜、と、昔、と、い、は、後、の、房、
本、節

志りんゝの救婦くほうあつし

野臺

ウツルハナノミ

習
紅

本草八湯入おんあしん

巴山

千子。あまうりけいこ

15

子之小神也

邕達

水之月也朝之風也

蘭

出之於其時

宗

丁巳年淺草の春也

九
那

唐の書つゝ
関のしるし

千那

月餘也
乃歸
德
縣

西廂記

夕ふや山並いさき

去來

諸君

やゝの今のと比叡は似て

大坂之道

珍碩

不知讀人

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯のきくやまのふ

曾良

芦原や鷺の寝ねおを煙の風

山川

あまのやみや鬱令留れ枯のふ

凡北

く川露や猪の臥芝の起あらし

去来

大比叡やしらぬや草のやみあ

野童

とふらりて跡ふかれや木の苗

凡北

文月や六日もなきの夜ふ似す

芭蕉

合歡のふれあふふいふあふ

同

せうやあふらいうふらあふ

杜若

こやこやのほらうらやうり相撲取

去来

朝うらやま寝るあふのちうら

風姿

あふやあふこの曇れはくもす

及肩

あふのほらまよふは木槿ふ

嵐蘭

あふあふけくするは木槿ふ

秋風

あふあふけくするは木槿ふ

千那

伊賀小年

伊賀

膳所

方上

三

23

23

九北
 楊乃之代
 萬
 九北

君之小人也
去來

平田

え禄二年、勅使に
とちのくより三越
の卿よりかの國
より約りてい
て

田日良

名色

九
北

主人

落籍

望田より

飛馬れはさしむるて海

色焦

海との色を小海老よりい

同

加賀の小まきと云ふ多田乃

神社の宝物と云ふ宝

うきうき草乃よりい

錦のそれより云ふ草を

うきうき草乃よりい

ひんやし甲のよれきりくす

色焦

葉島や二多ふれ中の虫

尚白

くさやちやまきと云ふ

風

いさよふと云ふ

葉月や多鶴は海より人

千人

こころ月に蜚魚のあつと云ふ

之道

葉釋と云ふ處ありと云ふ

半残

月えせん休見の鶴乃松郭

去来

翁を茅舎より云ふ

伊賀

はもろろ松笠のよふ月

土北方

加茂よ詣志ては涙の如き

ちうこのやうに非は

月孰や拍子もろく膝の上 史邦

女達の六條はかきうりて

伊賀

影やうたてては朝月夜 卓袋

しやん美やあしーい日の孰 乙羽

京筑紫をすれ月う傍中る 丈艸

明の相もやそよ月一 凡兆

ゆりひてこもしやあらぬ月のぬ 尚白

向の能きちの月んをあられ 曹良

え禄ニきつては俵り

月をさうて氣はの明非

月渚ーおひのそよみ乃と 芭蕉

仲姪の望猶子をも送葉

うゝ夜の月もつらかりおと遠 去来

明月やあそき茶はあそ 昌房



月入るる人の破さう
羽紅

僧止のいふふ屋れさめし
尚白

新瀬や鳴つのはの地柳子
凡兆

一戸や衣もやうこそし人
去来

稗の種はる途一こそし人
越人

洪糟やわつふの食子荒留
正秀

あやまうてきう地いふ鐘子
嵐南

一鳥不鳴山更幽

物の音いりたりと葉山あや
凡兆

いづき拍あつてふ里柳子
曾受

旅枕庵のつとを軒下
千里

鳩やう洪柳あふ齋麦白
琢碩

とりやうとや柳のふ
凡兆

鱗釣ひもつと一鐘つり
半残

わあ向いふふ通ちさう苗智
尚白

葉を切る跡まうとふなり
其角

うきうき弱の命やせむれ 珠碩

うきうき弱の命やせむれ 土芳

縮うく母よ出近ぬきあは 凡北

自題落柿舎 凡北

作ぬく竹やちもあは 去来

志しはちやちもあは 塵生

肌さし竹切のすみ葉 凡北

神田ふ 凡北

まゐりしうしれの物あはれあは
神田ふの鼓うり音 整
あはれあは

うきうき弱の命やせむれ 嵐雪

うきうき弱の命やせむれ 丈艸

立き弱のやうな 凡北

世の中、鶴鶴の屋乃し 同

埃臭け歯よりさうや 荷公

猿蓑集卷之四

春

梅咲て／＼方怒り悔もあり

露沾

上鴈の山莊よりうきうき
候しきりり

梅々や山路隔入るかな

去来

しるゝ香やふ入栗牛の角

句空

庭真

秋々や砂利も流す谷真

土寄

よきことありて候なり
もて人の心も風物も忘るるや

夢さるゝと一むくやもほく極
百へのひてはしらぬのしら
ひら寝の能く宿るゝおひ目
野田や尾越のしら摘るる
くつやちふ満するる家私
おもひもよあけやみこい入
如行

憶翁之客中

裾けく草をうつとく人草枕
つとく踏ふやもさるる
七種下跡より朝より
家より離のより根草
うすのやちのよさるる
膝より草のより月あられ
鈴より草のよりあられ
鶯の草踏ふす垣角
嵐雪
路通
其角
丈草
其角
同
去来
伊賀
一桐

雪やしらぬ一みれきし 江戸 溪石

うらやなを海あしれ 其角

鶯や下駄の齒よりく小田け土 凡兆

雪や窓より久ちをすそえあし 伊賀 魚目

やぬの雪柳よりふす 江戸 探丸

けし溜みきめ持へき柳 ト宅

詠うにきへてしれす柳 遠水

いさ川極変れす柳 尚白

青柳のきりけや鯉の住所 伊賀 一啖

あけや鈴いす場 木白

待す乃 揚水

因家よ在て

まや 色蕉

うや 越人

うき 去来

雨路 餘寒の當座

龍虎山

白雲

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

龍虎山

彼岸よりとむる一夜三おの 路通

ふりや常れありて涅槃像 野水

花並ぬ裏ハ燕乃やうい道 凡牝

えさうく今や紀のへいふの居 伊賀 沢雉

春ぬや年ぬのふふふ花はぬ 嵐虎

ふりよけ

まゐやうりやうりやうり門 猿錐

不性も金もさ起るれまのぬ 色蕉

春ぬや田舎のふれ雛賣 史邦

ふりよけのふりや軒まの花 羽紅

泥ぬや田舎水の喧つらん 史邦

蜂こもも木舞の竹や虫の糞 昌居

振るや下座よりまゐるまゐり雛 去来

まゐりよけのふれ雛の喧るのふ 伊賀 萩子

桃柳くらりありとやをんあれ子 羽紅

ふりよけ境よりぬるぬる 三河 鳥巢

里人の暗居しる田畑られ 嵐推

暁のまゝく一と夜寝よる有夢の 半残

帝の鳥切て白根の森をのまひ 桃妖

いのちのりくもすしや 園風

月の影やこもくれよの親すめ 珍碩

花の露ぬむる人のすめや 椽の光 土芳

南の空や果をまきうてあけ 衡 芭蕉

越より飛来入りてを詠め

あふりて

鶯の巢の樟の枯樹よ月をぬ 元兆

ふもくうりてくもる雲の 石に

子や結ん餘りきまなうきあり 杉風

いづらあけ中れ拍子や 雛あめ 芭蕉

芭蕉菴のふもすま 訪

蓬草小鋤はしあやられ 曲水

木石筋旅して思ふく 山店

畫譜



山吹や夕日の焙炉は白く時

芭蕉

白玉はあやふく枝くれ

車来

わさびの葉はくさくさ

うしろの葉はくさくさ

竹もくさくさやちり枝

羽紅

鵜牛やふくさくさ

坂上氏

うしろの葉はくさくさ

芭蕉

うしろの葉はくさくさ

利雪

東叡山より

小坊まやふくさくさ

其角

一枝はくさくさ

尚白

雛のふくさくさ

凡兆

ふくさくさ

丈艸

馬場のふくさくさ

史邦

ちりやふくさくさ

千那

葛城のふもとをさるる

ねるるーあまのり神の類

芭蕉

この国は地味の色いろの
あはれ乃ハ空橋の神は降
らるるものと云はれんを
せし

一里ハそれなり子孫の

同

この文の墓東武谷中にあるに
三歳して死ねる年の後
城よりその墓のおもひ橋を
つくりしやうと云はれり
ついでにそれ橋をたつと云はれり
世に傳へるる事なり

まうやの吸ふ所の世還

園風

知人よあまのりくをあらん

去来

ある僧の煙りーあまのり

九北

浪人のやうに

嵐を弄め夜あれう花散

半残

野きくもあまのり神は

伊賀 長眉

あまのり神は

大寺やうに奥乃あまの果

曾良

道灌山よのけ

る濱やまきりのびをうけし 嵐蘭

ほけの強きん

探子に夜しるまれまきし 羽紅

庚午の歳家を焚く

後よりけりしきりし花はらりし 北枝

しらけりしや加蓋の櫃や 凡北

あ棠けりしと満より夜の日 普船

大和の脚り

草師よりきりしはたぬのよ 芭蕉

しらや躑躅よりけりし花のよ 探丸

やうし海よりきりしやのり 智月

兎角よりけりしやのり 山川

鷗鳥のよきりしやのり 式之

木曾塚

其のよきりしはたぬのよ 乙卯

春風夜をふくむお殿の堂は 曾良

望湖水惜春

けふもまたいづのやうに 芭蕉

猿蓑集卷之五

鳥の羽を刷ぬまゝに 芭蕉

カイツリ

去来

一歩も引かぬまゝに 芭蕉

股の朝のあけに 芭蕉

たぬきまゝに 芭蕉

まゝにまゝに 芭蕉

人まゝにまゝに 芭蕉

邦 兆 来 蕉 邦 兆 来 蕉 邦 兆 来 蕉
わ
あふふふ墨海やうと娘を
いふふふふふふふふふふふ
何事もすまぬの目にはあち
里ふふふふふの目には
ほふふふふふふふふふふ
是をふふふふふふふふふ
吸ふふふふふふふふふ
三里ふふふふふふふふふ

邦 兆 来 蕉 邦 兆 来 蕉 邦 兆 来 蕉
この春も盧同の男をふふ
ふふふふふふふふふふ
いふふふふふふふふふ
いらふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

寝るをさへ起るかな
 陸をうりて車にこむ
 うき人を枳殻垣よりぞ
 いさや別の方より出す
 せりけよ掃てうらをさ
 ゆきひ切るる花をひるよ
 青天よ有明月の影りけ
 湖水の松乃比良代よりぞ
 蕉 兆 来 邦 蓮

紫のや蕎麦のすまけ歌をよ
 めのこ老智ぬ月をさ
 押合う寝るは又きつり
 しられや乃まゝ赤き
 一掃歌つゝる念のこれ
 枇杷のたをよはあき
 蕉 兆 来 邦

去来九



田漢 九

凡 九

史 九



海濱

...

...

...

...



...

...

...

...

...

...

...

...

九

田漢

...

...

...

...

草村は蛙こはるのまゝに
 露乃芽とふにちねりす
 道心のわらひあはれつるむ時
 能やれ七尾の冬は作うと
 魚の骨志うする老を延そ
 待人入る小川の鏡
 立ちり扇風を倒す女を
 湯殿は行の葉は侘しと
 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

苗番は言を吸ふ所す夕風
 傳やとしくすりく入る
 きのこの様とせをける妹の
 名
 五十六はよふつりふ所
 足袋はくもく黒はふる
 追ふて早ふはる乃刀持
 了らるる何し水はほふ
 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

戸障子もむらさきの雲を
うんときりぎりす
ころも草鞋をけり
蚤をとりしと起し
そのまゝころもきりぎりす
ゆふや蓋のあけ
草庵は暫くおとす
のちのてい

蕉 来 蕉 来 蕉 来 蕉 来 蕉 来

さよふと品うら
はの果ては
あにあり
はるる
まはるる
さよふと品うら

蕉 来 蕉 来 蕉 来 蕉 来

芭蕉 十二

去来 十二

灰汁桶のきせとくもりも

あつたつとくもりも寝て

新玉あつたつとくもり

あつたつとくもりも

手代新くもりも

あつたつとくもりも

凡兆

芭蕉

野水

去来

蕉

兆

京出く駄は餘る丸りの物
 唐耶くさねはききくは
 中よりにうすく金ハ風薫
 陸のるさきききききき
 きのきききききききき
 近ロきききききききき
 金銀とくきききききき
 あく月きききききき月

来 水 北 蕉 来 水 北 蕉 来 水 北 蕉

町の秋の文は明や
 何きききききききき
 名きききききききき
 うきききききききき
 柴きききききききき
 きききききききき
 旅の地きききききき

来 水 北 蕉 来 水 北 蕉 来 水 北 蕉

丁巳年一も女はなほもくもく
何れもくもく 娘乃ちく
夕月之夜星の草のくはるる
人もくもく ありくもく
くもく 自慢のくもく
又もくもく 部をくもく
くもく 田のくもく
加へくもく 六のくもく

来 水 蕉 兆 来 水 兆 蕉

抱うりれ尻のくもく
雨のやうに 女はくもく
昼はくもく 星のくもく
くもく 水はくもく
糸はくもく 股のくもく
来くもく 三月 曙のくもく

来 水 蕉 兆 来 水

芭蕉 九

野水 九

去来 九

[Faint bleed-through text from the reverse side]



饒乙刃東武行

芭蕉

[Faint bleed-through text]

[Faint bleed-through text]

[Faint bleed-through text]

[Faint bleed-through text]

[Faint bleed-through text]

[Faint bleed-through text]

乙刃

珍碩

素男

刃

蕉

改やうつて踏んぐる

男

編のふた乃力なき

碩

ふしんておまけに終幕と

蕉

四巻頭より昨より

品

卯の刻乃眞まに並ぬ

碩

すもも松の志のあら

男

秋のれすもこのれよ

品

青いこいこいなる

智

懐よるまをあら

凡

ゆきももぬまのあつ

品

鏡の柄よるまをあら

去

灰まももあら

兆

まが目よはるまをあら

正

店屋ゆき休のま

来

はなはたのまのま

半

まが目よはるまをあら

残

まが目よはるまをあら

土

大膽よめさしきりあはれ
 身いれぬ所の取所なり
 小刀乃鈴又下る細工
 柳よ火とりす大年の夜
 うへより下りし使も後
 しのり合せたるかき
 此なるめをさるる破
 聖神様とせしきり月
 残 芳 園風 猿 残 風 雛

咳の隣にちきと撮つ
 海へさしきりさるる
 秋のさきとさるる
 一すもあさるの割
 花よさきとさるる
 雛の被るさきとさる
 芳 風 嵐 史 野 野 紅

乙卯 五 土芳 三

珠碩 三 園風 三

素男 三 猿雖 二

智月 一 嵐蘭 一

凡兆 二 史邦 一

去來 二 野水 一

正秀 一 羽紅 一

半殘 四

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥山向のうろよ山を

國分山と云ふれと國分寺の名を

傳ふなりと一禁扉は細き流を流

るて翠微と云ふなりと三曲二百歩

は八幡宮なりとたゞの神体

ハ弥陀乃る像と云唯一の家と云

甚に忌むる事をと两部光成和の
利益乃塵を同くしたまふ
又貴し日比々人の詣さるれハ
いと神さし物さるる傍に位
捨に草の戸をよもよも根を斬
るるを年々より望み居て狐押
ゆとをぬより幻位巻と云あ
の僧のくハ勇士管沼氏曲水子と

伯父よあんゆりとを今八年
じとゆとゆとゆと約住と人の名を
のとゆとゆと又市仲とゆと
サキサキとゆとみとまてらと
身と養生の子のとまの虫と
家と離て奥羽家信の書と目
とり面とととととととととと
くくくく北海の荒磯とととと

破らうと歳湖水の波は漂徳の
浮巢の流らうと人さるれ一
乃陰多のそと軒端あふ
先頃日法はあつてお月れ
初いとううたへーあやうと
しとさうさういふあうは春
のあはれもさうなつてあはれ
とさうさういふあうは春

里の住のこた入りきつていのちの福
 ういふと一鬼の豆畑よりあや
 歌ゆきぬ農談目眩よ山の端よ
 うきき夜屋歸より月を待つてい
 新をけし燈と取ての國西よ是れ
 もうきすいといふとていふあや
 深寂をぬきし野よ跡をかくて
 こいふとていふとていふとていふとて

あといふとていふとていふとていふとて
 梅より独り身れ種をまきし
 あいふとは官金命れ地より
 やいといふ佛離祖室の籠より入
 らずとていふとていふとていふとて
 よあやとていふとていふとていふとて
 暫く生涯のちかきとていふとて
 孫よとていふとていふとていふとて

る樂天ハ五臟ノ神と云ふ老拙ハ
瘦より賢愚文質のいふ
いふのいふの拙と云ふ
いふのいふの拙と云ふ

いふのいふの拙と云ふ

題芭蕉翁國分山

幻住庵記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景固人
義也間讀芭蕉翁幻住庵
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉廼作鄙章
一篇歌之曰

芭蕉南分國分嶺

古松鬱兮綠陰清

茅屋竹牀幾數間

內有佳人獨養生

滿口錦繡輝山川

風景依稀入誹城

此地自古富勝覽

今日因君尚益榮

元祿庚午仲秋日 震軒具拜

儿右日記

昨有脊中ふんやる林屏の曲水

くわくせん跡さつやまの山野水

鶏もろくく鳴る鳥なき去来

海へ五月雨ふゆやうと凡北

軒らうと石梁やれ表のあ千那

細腰やうとやうやうのうと珍碩

贈紙帳

おもゆる紙地よりを綴り
野徑

いしきとて路のなまより
里東

曇れぬよふころの露
膳所 乙羽

顔や薄乃中れ花より
怒誰

白や〜 寄よと結〜 寄
探志

五羽六羽菴よりさす人とき
膳所 元志

まつ〜 水鶏
泥土

笠あふりねす〜 月の色
史邦

月結や海を所国よりす
正秀

志つらさい雲の糸洗し清水
立人 柳陰

涼〜 来うじね
如行

訪よ留らあり

椎のよき〜 蟬の
膳所 朴水

目下やよはぬ程は涼
義濃 市隠

文よさるす

接所来や早苗のうづ涼
半残

麦乃粒を吐き出す

一袋にこれや身お田のこころ麦

之道

書音

長崎

一隻入るふさふさや粒のよき

魯町

夕立や梅木の奥に一本さうり

及肩

昇袂揺排

梅のや田と山はさうり

尚白

贈葉

志々々めもさうさうのいふ

北枝

木履めく清ふきさうり

木節

包紙の書

膳所

稲ふさふさを佛にまき

扇

石ふさふさ果下り

智月

桶の端やさうり

羽紅

黒ハハクさうり

昌房

黒ハハクさうり

何処

啼やいほほはりあゝ越人

越人といふは訪合て

筆の交れ借し飛入菴のれ等哉

明年生尋旧菴

春のふやふしは星すふはいつ嵐蘭

同其

涼やいほほはりあゝ曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑誓之首韻也

非比^{スルニ}彼山寺偷衣朝市頂冠笑

只任^{スルニ}心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去来随翁遊学棊館

竹窓躡等凌節斯有歲屬撰此

集玩弄無已自謂絶超狐腋白

裘者也於是四方嗟友憧々往

來或千里寄書々中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集錄者索居竄栖為難
通信且有旄倪婦人不琢磨者
廉言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維貳元祿四稔辛未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會北來吟席
見需託此更題尋尾卒爰毫不
揣拙庶幾一藁高張有補于詞
海漢人云

風狂野衲

丈艸漢書

正竹書之



京寺町二条上ル

井筒屋庄長衛板

刻刻入心
蘇軾無幾一集高飛直下
其書非此
題名刻錄
第64
第36



